

ヘリコプターから見た南極大陸。雪上車とその走行跡が見える。

森林研究部門 森林防災研究領域 チーム長 竹内 由香里

第57次南極地域観測隊では、昭和基地から約90km離れた南極大陸氷床上的のH128という地点(標高1380m)において、アイスドリルを使って氷床を掘削し、深さ261mまでの円筒状の氷試料(アイスコア)を採取しました。平均の厚さが約2000mの南極大陸の氷床は、降り積もった雪が融けることなく、その上に積もった雪の重みで圧縮されて長い年月をかけて氷になったものです。深いところほど古い時代にできた氷で、採取した261mの深さの氷には約2000年前の空気が閉じ込められています。こうした氷に閉じ込められた空気の成分を分析することで、過去の気候や環境の変化を知ることができます。

2月初め、私は掘削地点の撤収を支援するため、ヘリコプターでH128地点へ向かいました。氷床掘削チーム7名とは12月下旬に南極観測船「しらせ」を離れて以来久々の再会。雪上車の中で一緒に食事し寝起きする生活をしました。帰路はルート沿いの雪面の高さを観測しながら、3台の雪上車に分乗し、2日かけて昭和基地対岸のS16地点まで戻りました。

360度見渡す限りどこまでも続く雪原を見つめて過ごした南極最後の6日間でした。



写真1 そり 機を引いてS17内陸基点まで帰り着いた雪上車 (2016年2月5日)



写真2 南極大陸氷床を行く雪上車（2016年2月5日）



写真4 掘削したアイスコアをヘリコプターへ運ぶ観測隊員と「しらせ」乗組員（2016年2月5日）



写真3 ドラム缶の燃料を雪上車に給油する様子（2016年1月2日）



写真6 南極大陸氷原の夕暮れ（2016年2月4日21時30分）



写真5 夕暮れ時の雪上車とカブース（櫛の付いた小屋）
氷床上では、これらの中で食事し、寝起きした。黄色のテントはトイレ（2016年2月4日21時30分）。